

朝夷巡嶋記

第二編

卷三



庫書	50
架	5
番	188
冊	40

島

朝夷

巡

~ 13
3093
8



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

昭和九年七月三日
東京

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之三

東都 曲亭主人編輯

初輯第十五

悪を罰き 劔の山麓
善小 慶小 百田の宿



吉田屋

却説その夜。朝夷三郎義秀の根柢平小竹典を昇一之劔乃
山麓へと赴く。廿四日の月。いづれも生むる鳥夜。悪根を
ととめんとす。蕉火を把せしむ。件の小厮。月来日來。熟る路を
物とも思ふ。郷導を志す。福小義秀。こまに呼かけ。その行程を
見えし。あへど肩をかえ。劔岳の麓へ。三里あつともゆり。又
あり。みちの程難所。二里。みち近づく。いづれも路より。進
と。同之。これ。と。途の嶮岨。を感。進。を。と。

月二編卷三

急くと將た甘根ゆ莖平ころる果と。捷徑よまを進まける現は途ハ
 りまよの。こと後ま」と急ぎいふその夜子の比及小劔の山麓ちくまわ
 振勇瞻れば天色出づ九月のけりひせり。當下根助莖平ハ道次ハ竹輿と
 おろし客入この如より。山の主ガ宿所へハ二四町の間あり。原ハ慈航寺との
 山寺うらう。近属類廢く住持あり。よまて彼魔平太ホハ老僧道人と
 出くこの廢院ハ落草たて客殿いも破損せま其如小住ひいとど
 ある人のヤる路ハいと直ま迷せぬべうとあまご。あまく暇多めれば
 といふ小義秀うち点路さて入るを安う。和達ハ且く樹下ハ休ひて暗号と
 やらねる。所おそしと。他所へ退る越度る人と敬言ま二人の小厨を
 唯こと心く竹輿反扛よせて草折布て坐を占り。義秀ハ只ひとと彼慈航
 寺小末てんま門傾瓦牆破しく鎖せども甲斐ある。溝埋と橋ちりく

卻波易う。その為今夜目まま不定うぬんえ秘ども。如く小樹立ちりて昔
 由緒ある梵刹とおぼし破牆の裾潜入りく人を方へと進む程は本堂経堂
 の餘波もや柱石のまうは又跌トとして歩み運。枳の色うち遠ま前向ふ
 ぬまは豊舎あまう。人の泣声幾ハ声を秋るは暑を比るれば兩戸
 みまより故より燈燭いと明ま庭の芳宜を木箱みく同ちくませま
 闕窺ま廣座席の中央いと大なる組極灰札のむ推直し唯妍
 ころ一個の處女をそが上推伏く。悪鬼ハ笑ハ見景漢格子織乃浴衣ハ
 圓枯の帯。まふ結びく。緋の統鼻禪の垂をあふ。處女ハ黒髪ハふかま
 へく右ハ小劔肉の庵刀を閃く。女郎才ハ小本賣をま。はまらうら
 靡せんとまふアそ鮮優く。甲夜ハと機嫌をま。せもま。随ぬとて詩
 さんやまらふこの肉刀をめく。曾とより臍とより孔穿融ま。豊環ハ

蔭中寄宿の恩人百田阿爺相禪とこの愛女友鶴を救人為ふ来迎せり。
 項を洗つて刃を受つと声高う罵れ魔平太ハヤと怒り敢て向
 答せど放さんと跳けども右の腕へ腕絶す半身既に枯る如く顔色
 さふ蒼然なりこの勢ひ酒醒る悪棍們を騒ぐのこ有聲不近く進
 りぞ衆声うけ力を副は魔平太こふ激され久辛うと終放ち刃を
 左にふと直と跳揚と突懸ると義秀を身を反て刃を礮と打落し
 怯む如く項髪脛と棋のどく挫轉し左の猿臂をさし伸け友鶴を扶お落
 しと膝ふ布さる魔平太を彼姐板ふ脛のぞく仰さるふと動せど肉刀の
 刃尖晃ことその月前へ衝せると赤熊太水六沼太郎中太ホハ人保とれ
 いようさびく度狐失ひ半弓をひふとれども箭を獲とも能くぞ難刀を小
 腋ふさるとも樹人とや人擬勢うく呆果さるむかるとるのそのとれ義秀ハ

女を勦らざると決しと許さるとはとくといそぐ立是吞せよと腰に著る
 茶籠と投与れ婦女輩へ歎びと友鶴を技抜き庖福のうへさるまてえり
 義秀ハこまを目送す快愉うち笑ひ肉刀の背り、魔平太が頭を礮と打
 敲き兇賊甚麼多ひさるや年来人の五穀を盗く飽をも食ひ悪報金錢衣
 裳取掠りて燻衣なる悪報人を懲罪るを殺しとこちよとせ悪報美女
 少年を弄畧て刃の樂ととる悪報法師を逐ひ精舎を撤しておの棲家と
 する悪報五逆忽地報ひす十悪肉祖小集りぬ天罰四罰今はてを
 屠らるも遅うふとやと罵責て突さる刃を些し引揚る胃へさりと刺立
 まハ苦と叫ぶ声の下ハ鮮血さりと潰り刃尖うく姐板の真中切て要員と赤熊



善の
身
単
魔平太
等
親

友つ侍

お八か

山の主平太

山の中太



お八か

真水沼太

お八か

朝夷二編卷三

月夜二編卷三

納く固氣採く宵月のあつりをせじく扇たぐ汗を納きいそや残したる奴
 原を結果人とひとらごらるる危福のふふ赴たけとさる様小彼十餘人の支堂へ
 奥るる大刀音小驚馬を醒てこふゆと慌忙き戸を推開と出人とまはし寸
 らるるも動後がまもく苛て後るる前るるの爪搔退つと推開人と諸母を掛
 矢声を出し推とも動むあるわうと立昏て立るる人とも相擇しゆらぎ時々
 移るる果の衆皆根旁にく呆とく戸際又推並び頭を傾けゆ又死と
 齊一吻と息をつれ宴小こぼれ怪有るるをえり夢みと入あふるやと一人が
 への皆点跃越後の資長滅ぶと又も越路へいも静るるま加賀の富樫も
 自國成りて他郷の沙汰は違は然るを又竹より軍兵を向くゆき今こふ
 奥るる人声響音は第一の不審又この蔽屋の戸まア六日未より素直
 みくもふ掛は開らぬが神樂未るる巖戸の如く勢大勢力なるヨメカ

唯がゆめ及び第二の不審覚るあふれとるると正くるると多とも現るるが
 虚とこふ龍も不覚えととととの如三方へみる板壁るるを毀く出ん
 透るる夢も現るるまよくと念とる様ふすまくと列下き奮闘空戦
 撃とく嘯く苦痛の声雪頬を打と逃る足障子みかる血まの音と入
 雨の撲と耳邊近くゆめゆめおちてゆもまを立とるる又おとてと
 龍乃き檻の獣も異るるでせふせんまはるるとけり。その中み小さう死一人
 漸とらつたて。當ふ丁と拍鳴半悞アと疎なり。この戸の終る開るるの聲
 ところ所外面は物々積下せ置とるる推開人と考まはるるを勞て功る
 時分を殺せ櫓牙緩とく戸を引放さるる小物りるれとよと下み
 かろく開つたの公漫るるれとち笑へ皆有理と雷同とて西入戸死のり
 身を掛足を踏声をたると曳くと引を破と外に一高と共小積下せとる

貪心も亦小この夏はあまごの或は拒く後ろむとてその意は憐にけりめち
 殺さすつらとせむとめ九層の漏れぬ吾門三人とり遠されくゆりたのく
 天日光あつるころ偏小君が侍思え是より外小婦女子今一人もたぬけ
 とのひあまご諸袖を顔に推めて伏沈と友音よと泣き多る後秀が嘆息
 けりぬるあまごめりるは憐にしくと泣きぬべりるをあれ悪提們が姓名とよく
 志するの一面人後ひ来るといひうけく又奥の房小赴けが紗燈を塵小滅残りて
 屍彼此小横り血の流し席を染て涿鹿の野の似たり後秀も後ひ来ると
 加く澤猪谷のよみ子をええり俯る死骸狐起しくと泣き難彼も難と
 曲々小回へ二人のなき子へあそりく漏さごとその名を告る程は後秀へ遠く
 墨斗の毫を抜出し懐紙を引裂て悉く字を免先魔平太が首を刎てその
 袖小引畏く猪谷の女子小めじその餘の死骸の耳を則く却りく小紙牌を

附肉を削る針小納く加賀次婦人小めじみづう紗燈を引提く庵漏よ
 鄰一室は赴き又骸どもの名を問耳取則紙牌を附ると初のごく道狐由
 件の跡小納く腕て庵漏小立く互に友鶴へ淀津の女子小慰きて俟てり
 當下美秀へ婦女们小うち對ひく汝も處女を扶掖き門外は出てこれ
 俟迎の轎夫由彼知へ来るんとくといひ立ま一人へ友鶴を扶引死二人へ
 魔平太が首級取携へ耳を納る跡を抱く先小立ち案内せると美秀も
 庭ごも出で佛経寺宝のあるとやさとと猥もろくあつるとみま立とて物
 終るあるところをえ竟小母屋小火を放く立物くんを云雲齊く鮮明
 の月さう昇り夜ハ丑三の比るころりとも程小根成莖平へ彼樹下小坐と
 占て更ゆくま小慮寒く心細さゆ中もあそこの天をうら仰きいふ
 ふうふじまら程は蒸航寺のうふ丁く火氣煽くと燃あがるところや暗号は

明王の
擁護更よ
舊縁を
引着も



友一伯



新玉乃妻



五判向插

おいか

内外の。老僕代おとらふに小奉動こほうどうをや一とせ送おくりて。昨日けふの不慮ふりよの厄難やくなん。
 速すみに四司しよしは辨わその武威ぶいを借かる不ふあざむかひ。かろひ。と喪さう決けつり。吾われ侘わのあや
 の名代なしろの富とみ握にぎ殿どのへ。あるとく。後ご者しよ一人ひとりを。おく宿野しゆくやを。出い通と青あ走そうる。招まねふ。と。四
 里しりあり。来きつると。忽たちまち地ちは。公こうつ。松書しょうしょの。い。つ。と。後ご者しよ。小こ回わい。は。と。答こたふ
 こと。不ふ。瞭りょうと。出い。松書しょうしょを。送おく。と。不ふ。く。と。彼か。知ち。へ。お。れて。お。せ。ん
 せ。る。あ。る。死し。や。と。吟ぎん。ら。ん。賦ふ。く。其そ。れ。も。引ひ。え。し。天てん。明めい。く。後ご。不ふ。中ちゆう。や。く。小こ。歸き。せ
 る。と。め。く。と。和わ。毅ぎ。の。武ぶ。勇ゆう。あ。の。の。歎なげ。び。これ。も。疲つか。勞らう。を。と。ち。忘わす。れ。い。ふ。く。その
 壯さう。夫ふ。を。下くだ。目め。え。む。や。と。彼か。知ち。より。窺のぞ。く。又また。驚おど。き。又また。歎なげ。び。と。一ひと。志し。不ふ。ま。ま。朝あ。夷い。三さん。郎らう
 と。名な。告こ。と。る。の。の。大だい。儲もろ。の。阿あ。三さん。郎らう。執しやく。と。仇かた。く。唯ただ。由よし。せ。む。ば。左さ。退たい。れ。く。友とも。鶴つる。と。の。不
 由よし。を。告こ。稚ち。枝えだ。の。花はな。を。老らう。木き。の。挿さ。げ。不ふ。出い。榮えい。せ。ん。と。せ。侍さむらい。か。り。叔しやく。と。死し。と。と。め。る。り。る
 る。今いま。さ。も。必かならず。が。槌つち。の。口くち。の。彼か。巨こ。石せき。を。落お。せ。り。も。神かみ。の。野の。あ。る。あ。る。き。定さだ。ま。不ふ。和

殿とのの孝行こうかう義信ぎしん技わざも旅たび力ちからも世よの人の馬うまと。一ひと。と。い。ふ。さ。く。と。活い。る。と。神かみ。の。社やしろ。と
 扇あふぎを用もちき。と。あ。る。立た。扇あふぎ。と。い。ふ。さ。く。と。と。い。ふ。け。る。は。對たい。面めん。不ふ。飲いん。ひ。氣き。と。不
 顯あき。と。く。恭こう。と。く。も。膝ひざ。め。か。れ。恩おん。人ひと。恙や。る。り。歎なげ。曩なう。と。大だい。特とく。小こ。瞭りょう。と。別わか。れ。不ふ。と。と。一
 言こと。の。酬ちゆう。謝しゃ。も。述の。む。と。い。ふ。と。公こう。苦く。と。い。ふ。と。安あん。房ぼう。と。越こ。路ろ。の。北きた。南なん。百ひゃく。五ご。十じゆ。里り。隔へき。と。り
 何なに。の。ゆ。へ。と。い。ふ。の。あ。の。と。昔むかし。き。交ま。じ。の。ひ。え。年とし。未ま。越こ。路ろ。と。相あ。識し。人ひと。の。あ。り。と。い。ふ。と。一
 代よ。と。い。ふ。と。一ひと。と。行ゆ。り。回まわ。り。と。い。ふ。と。あ。る。と。と。ち。点ち。と。和わ。殿どの。も。母はは。の。物もの。と。い。ふ。と。この。名
 東とう。金きん。の。橋はし。六む。の。と。友とも。鶴つる。と。い。ふ。と。和わ。殿どの。の。假かり。父ふ。豊とよ。六む。が。女むすめ。小こ。蔓まん。と。い。ふ。と。と。い。ふ。と。一
 年とし。豊とよ。六む。が。長なが。れ。病びやう。著あ。愈ゆ。て。の。後のち。又また。と。い。ふ。と。小こ。分ぶん。貝がい。の。病びやう。は。痛いた。れ。女むすめ。房ぼう。葉は。と。い。ふ
 奉ほう。公こう。せ。ん。と。い。ふ。と。尚なほ。當たう。歳さい。る。女むすめ。小こ。蔓まん。を。親おや。と。い。ふ。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。と。一
 志し。と。い。ふ。と。小こ。蔓まん。を。上うへ。総そう。へ。遣つか。せ。り。則すなは。ち。この。一ひと。と。い。ふ。と。の。野の。縁えん。あ。る。と。い。ふ。と。と。い。ふ。と。一

某遠く上総を去て。年来當國に住ひ居ること。さぞ不審おれ人固り
 凡智驚才おれ。陶朱が富と學ぶよあ。子貞が貨殖をよくせ。あお
 越中へ父母の國。則先祖の本領。之壯年の比。故郷を離れ。且上総の僑居。
 活業の爲。いと親族の故國。なまべ。判五八。則兄が名。め。婦貞三郷の
 里正。原。平家。潛第の侍。越中。二郎。兵衛。尉。盛嗣。が。爲。六。従弟。上総
 五郎。兵衛。忠光。ふも。あ。か。ド。お。ち。なる。氏族。おれ。ち。父。祖。累。代。の。農。家。ま。て。仕。
 され。その。名。望。え。も。平。家。ハ。西。海。の。波。沈。淪。盛。嗣。忠。光。七。び。け。と。と。が
 兄弟。ま。へ。崇。も。なく。舊。よ。由。三。郷。の。長。う。へ。と。國。司。の。恩。命。園。園。世。帯
 安堵。して。財。ま。夏。の。缺。ね。も。兄。判。五。子。も。なり。某。も。又。子。を。奉。せ。平。家。世
 ぶ。う。と。あり。し。と。死。忠。光。が。所。縁。ま。就。く。某。ハ。上。総。ま。赴。け。木。綿。乾。鯛。を。買
 ち。く。八。州。を。て。花。主。う。り。利。潤。年。く。ま。あ。う。と。い。も。家。は。不。足。い。ふ。と。も。人。の

子を養へ。實子生ると俗い。うで女の子を。と。あ。お。け。う。安。房。の。大。瀧
 淺。江。ハ。如。此。く。の。赤。子。を。あ。運。そ。が。親。ハ。豊。六。を。負。た。れ。も。舊。家。あ。う。
 件。の。女。の。子。を。賄。せ。や。と。郷。ま。媒。姪。ま。り。も。此。あ。う。その。人。と。一。三。爺。と。素。よ。う
 相。識。人。な。り。ま。じ。バ。立。地。は。熟。淡。し。里。方。の。媒。妁。う。一。三。爺。も。對。面。して。
 元。曆。元。年。八。月。下。旬。襦。袢。の。中。小。養。女。小。蔓。と。上。総。へ。迎。え。と。う。ま。約。束。お。れ。バ
 産。の。親。豊。六。夫。婦。と。交。加。せ。ま。あ。の。ち。僅。よ。三。年。歷。く。文。治。二。年。の。春。比
 某。が。兄。相。向。判。五。ハ。時。疫。の。病。子。嬰。て。鍼。灸。茶。餌。の。効。あ。く。身。ま。う。は。し。の
 日。より。嫂。も。亦。病。が。ひ。て。と。れ。も。む。あ。く。な。う。ゆ。れ。と。故。郷。の。信。や。は。え。夢。う。と。ま。を
 曾。う。ち。騷。死。哀。と。悼。め。と。その。甲。斐。を。嫡。家。の。断。絶。の。時。と。人。お。ひ。し。は
 多。く。ハ。かく。て。あ。う。た。り。あ。う。た。上。総。へ。羈。旅。の。う。か。あ。れ。バ。家。産。と。ま。の。妻。子
 獲。束。と。故。郷。お。還。り。て。兄。が。家。督。と。美。嗣。死。つ。せ。く。の。通。傳。な。り。又。ハ。橋。六。と

更めて。稻向判五となり。親兄不及び。も里人小憎ま。一家はく
 繁昌せり。この比より養女小蔓と友鶴と。唯々堂の珠翳の花と愛
 慈と育る。隨心操いと優く孝行もた。容止と傳稀あり少女
 小わらう。つらく一人の子も。産の子と欺くこと。愛するは似く心
 狭う。実の子も不孝あり。養ひ子も至孝あり。匪果人罪ふ。とん
 つねく。雲時ぬ。地を竊は妻と。相譚ひ女児と。召て云云と。説諦せし
 渠が年。十三の秋なり。友鶴ハ養女あり。をめて知て。うち驚さ。且愧
 う。おもら。よ。親の恩。なる。喻る。物。ゆる。ね。と。たて。襦袢の中。て
 養ひ。と。られ。まじ。も。う。は。産の母。実の父。よ。弥。ま。て。おん。慈。と。ぬ。を。れ。が
 只。つ。ま。で。も。血。を。け。め。父。母。と。を。ひ。ま。れ。と。ふ。も。か。中。も。二。鞋。の。隔。絶。て
 侍。ぬ。雖。然。垂。乳。母。の。胎。肉。を。十。月。間。苦。め。う。る。産。の。恩。あ。き。ま

あ。ぬ。倫。ひ。は。生。涯。あ。い。ま。る。れ。と。も。か。の。二。親。も。恙。なく。百。歳。を
 め。願。言。の。一。つ。殖。つ。舊。里。の。そ。う。西。や。東。や。あ。る。祐。を。あ。ま
 な。う。と。そ。あ。ま。向。音。な。く。も。甲。斐。あ。た。り。ま。は。り。と。ぞ。う。答。て
 その。ち。ハ。安。房。の。安。文。字。も。ひ。ひ。ま。り。孝。行。一。つ。不。真。成。ま。小。隔。る。と。ハ
 ぞ。え。む。この。比。より。て。友。鶴。ハ。地。藏。尊。寺。の。本。尊。を。殊。き。う。信。ど。ま。り。毎。日。小
 續。經。怠。ら。ぬ。祈。願。の。筋。を。告。ね。も。存。や。亡。や。も。定。う。な。る。ぬ。産。の。親。比。二。世
 安。樂。養。父。母。の。為。ま。よ。この。大。願。を。獲。せ。な。ん。と。と。ん。ハ。憑。く。親
 ち。づ。り。地。孝。女。と。ま。ま。ば。ら。の。大。功。徳。空。一。つ。祐。去。歳。の。秋。一。三。爺。が。お。ご。う
 ぞ。て。舊。里。の。り。詳。よ。ぞ。え。豊。六。夫。婦。の。死。去。道。世。和。君。が。孝。行。復。讐。の
 その。顔。未。を。今。ん。ご。と。く。あ。ま。よ。く。知。る。を。ゆ。う。され。バ。和。君。と。母。の
 往。方。い。ふ。く。と。想。像。は。友。鶴。が。心。の。裏。か。量。り。つ。痛。ま。し。く。せ。り。く

妻とひびきつ。満しつる日ひひたつと蕭々小物づれハ判五さ妻ハ其
うらうと孝子孝女の誠をバ神佛憐あはれと乞ねがへて去歲の秋ハゆらうなく
一三爺いっさん環會わんかい又またの秋ハゆらうなくも朝夷あさひぬの資すけを借かるがまま母はは此こ尼に
御前ごぜんの所在あつらもあつらふふなうらひひやハ友鶴ともつる改あらため朝夷あさひぬ小物せうぶつ
あつらひひやうらひひ歎なげかたうらひひと凍こられつ頭かぶを奉たげ懐紙なつかしの目めを拭ぬぐ
膝ひざもさ日のまけひのまけひその面おもて輕かろハ夢ゆめももあつらふふぞな親おや小孝せうこう行ゆ
盡つくハあせししその方かたさむとせせくくらうらうどうも直あやささ産うの母はは実まことの父ちち面おもてらう
途あひぢぢぢぢあつらひひ先まへあつらひひの涙なみだは侍さむらいと鄙ひかの田舎のゝのいせせくくもあつらひひつ
までもこの妙とま足あし休やすまりて舊里ふるさとの面おもてあつらひひ方の物ものづらうづらうをせせめめ秋あきの
夜よを長ながくもせせ明あるる願ねがひひたたるるみみととひひああつつらら又また伏ふし沈しづむむ
一三いっさん呵あととううちち笑わらひひががららめめとと記き会かい筵いんよよううや酒さけををばばほほせせととも涙なみだををばばほほして

何なんももせん阿あ三さんどののハ去年こぞの夏あつより一年ひととせあままのの旅宿たびしゆくハ小物せうぶつ流ながれれああん
べべいいががそれそれ又また翌あしたももせせ多たんん愁うれをを掃はらふ玉たま帚きももああぐぐ盃さかとと効きまま判はん五ごハ妻つまの
ほほららううにおおままりりとと潛ひそややららふふちち相あ譚だんひひてて笑わらつつ一いつ三さんよよううちち對むかひひ今いま友とも鶴つるが
いいひひりりをを和わ殿どのハ何なんととせせららちち其その夫おとこ婦めかけもも亦また女むすめ兒こととおおかかりりををああらら願ねが望ぼう
あありり和わ殿どのハ固かたより朝夷あさひぬと志こころざしををもも知しりりああらられれるる大おほくくななううぬ縁えん者もの
ななままとと扱と搦とくくびびててええややといいれれとと一いつ三さん頭かぶをを傾かたけけ莞わん尔にとと笑わらててもも鳴なじじ
僕おれ既すでにに猜あやみみししううんん男おとこハ女むすめ婿むこをを擇えらぶぶああららいいののままごごああららいい稱なづふふののななりり
このこのみみおおああららいいとと向むかひひてて夫おとこ婦めかけハ笑わら片かた向むかひひををハハちちやや知しれれるる友とも鶴つるも
彼あいつ人ひとををああららいいとと願ねがへへるるくくれれハ渠ちもも向むかひひでもでもああららいいととああららいいとと朝夷あさひぬ
何なんもも世よ帯おびハ不足ふそくああららいいとと女むすめ婿むこハ招まねくくららいいとと廻まわりり女むすめ兒こをを妻つま
復また迹あとぬぬ小せう時じああららいいとと送おくりり遣やららいいととああららいいとと媒あひ婚こしてしてああららいいとと他た支したたららいいとと六む

一三ハ好くと応あへむ。ち咳起て小膝を進め阿三の目今や。如し。
 あり。の翁ハ豊六夫婦。大なるなぬ恩義あり。言をり死る縁を
 和殿否といひれ。媒妁ハ一三。これ否といひ。うけり。と
 せむれ。秀秀。親を改め。寔は。の好意。飲く。ひ。の。浅の。ハ
 うけり。と。い。ハ。せ。も。果。は。と。い。う。ゆ。と。結。れ。ハ。莞。余。と。う。ち。微。笑。縦。骨。肉。を。む
 とも。友。鶴。の。実。の。親。ハ。某。小。亦。親。之。既。も。の。親。お。わ。り。時。ハ。彼。と。此。ハ
 兄弟。な。り。は。や。この。婚。縁。ハ。兼。引。じ。と。推。辞。ハ。三。頭。を。う。ち。掉。を。い。あ。く
 それ。ハ。僻。言。之。和。殿。親。子。が。別。る。と。死。母。の。教。訓。長。物。語。を。く。と。ハ。か。い。小
 竊。す。て。これ。の。原。を。既。も。ある。葉。子。ハ。和。殿。が。乳。母。豊。六。ハ。乳。母。の。夫。主。徒
 小。して。親。子。は。あ。ら。と。彼。葉。子。が。教。育。を。和。殿。ハ。何。と。い。う。と。や。さ。く。も
 世。ハ。塔。養。子。養。子。妻。と。い。ふ。と。あ。り。その。親。ハ。と。い。ふ。と。骨。肉。の。た。ぬ

塔といひ又養子ともいふ。は。は。は。は。忌。諱。論。より。な。り。今。中。も。あ。れ
 和殿が養く和廷尉茂盛の。い。を。義。秀。を。抗。く。推。禁。れ。は。う。ち
 笑ひ。い。は。れ。は。い。も。う。い。は。ぬ。は。い。ぬ。和。殿。が。素。姓。と。云。云。と。よ。く。知。る。も
 辞別の夜。園。ら。も。竊。す。せ。一。三。が。外。絶。く。は。義。盛。の。勤。當。免。を。て。
 鎌倉。歸。り。な。り。和。殿。ハ。誰。と。親。子。と。や。あ。ら。も。先。祖。ハ。伊。勢。平。氏。越。中。二。郎
 兵衛。盛。嗣。の。親。族。な。り。ハ。舅。小。して。を。う。く。は。は。是。彼。の。て。良。縁。を。け。り
 多。と。練。も。ハ。義。秀。を。父。と。沈。吟。ト。て。応。せ。且。こ。て。頭。を。擡。教。ら。く
 緯。の。趣。み。を。理。く。覺。れ。ハ。今。ハ。脱。路。も。な。り。去。ら。ハ。あ。れ。は。某。親。ハ。勤。當
 一。世。の。勇。を。輝。一。國。家。の。為。身。を。殺。して。美。名。を。未。世。に。留。め。と。い。ふ。は。い。は。れ。は。
 この。浅。む。く。免。一。と。再。三。び。推。辞。あ。り。判。五。ハ。是。亦。も。後。に。朝。夷。を

和田慶のおん子こいひもかけも鳴乎ある婚嫁慚愧も堪む現俱利迦羅の
 一カ向いでも由来歴くる名家の子孫とせんとたひも己が死おひ
 あり願わ女兒友鶴を遠くとも側室としておん子と産せあつらん
 嫡孫とて家を嗣せん某今茲五十六歳頭ハ既白くおん骨の
 おほ健之幸小して上壽をたもば孫が生育んざらんやかくの如くある
 和君は妻なく側室あり子ありといふもなれが如しかくてもうけ
 むいざらと辞を盡せば妻も又繰返し復々之し一三共侶口説も更
 義秀もも嘆息しおの郡を婦負といふ婦負ハ則婦女長負之妻ふ
 りも義秀があは脱れぬ名詮自性女子のあうなりハ人力のよくなる
 事ありざるよ未おぼつな縁なれどもかくまをいひつを推辞ハ
 人の情ありといひ某下野の足利は旅宿せ日信あり友二人をばう別

と死よ来春へい由死く問んと約束せり又その里を過し
 紹介也加賀國石川郡小松の郷ある莊官が子よ佐味内高利といふ
 此の家とあはとせむあはかくて今幸よあは縁者の資をば佐味を
 憑やふ及ばひも彼女い由死く對面し云云と佐味よ告むハれ一言の
 約は背死て友は信を失ふかきば久くこの如く當るもあは死といハ
 判五ふち点陰春もなると下野へ赴たあとも妨なり但彼加賀の
 今ハ小松の郷とせむ彼人蹴鞠をよまると京鎌倉までえん新將軍頼家
 近屬蹴鞠を好まむハ件ハ佐味内を鎌倉へ召よして近習の後如く
 又内内が親莊官ハ今年ハ夏頓死して任あるもの職を嗣ぬ彼女へ赴
 その益あるとたがねも遠くもあぬ地方あり遊歴の爲わつハ赴
 あり可也内内ハ逢がらんといふも義秀うち驚たもあははく彼人

心あてよ小松の白六進退究べりしは舊識縁者とあは逢ひしは一もくも
 幸ひさきも借へてのまゝしてはひと死なむ所あり疑ふもひももその人の
 宿所ともえむやとあひせざる死ハ紹介の書状ある故之急ぐ死とせねる
 うち捨ておたがじとせよ判五ハ感嘆し寔は和君ハ信義篤し幸のこと
 丁といふ某共侶は加賀に赴死すつ小笠内が宿所へ案内しつ小富樫殿へ
 兇賊退治の趣を祈り首級実檢ゆ使へんその折和君ハ介殿富樫は對面して
 勇敢武略の爲体且和田殿の執子なるよし明く地は告るる輝鎌倉小
 上達して召出さるゝなりと更上陣を旋まらざるこの後ハいと真とあはく
 向ハ美秀頭をうち掉すよや鳥合の山賊們十人廿人替らうと功名と
 考よ足らぬかむらりの小事をせし恩賞を乞ひ帰系を祈らば愧る
 所ハ美秀が爲を乞ひぬる魔平太が首級を富樫へ送らばこの

披露志ありな時刻らバ功と名とおのづから頭を君父に見奉る目あり
 懇よ素姓をあらわして親と一辱するともバ信と恨とまうそ人を辭儀く
 禁ハ判五ハさうならう二三ハ顔うちありと嘆賞し吾們草野の細人
 なまバ絶て勇士の本意を知れども中のかくもいつとも隨よその意ハ悟る
 とはな友鶴がまらけり多と又他更もなく賄話ハハ美秀ややく
 点眼く目今示しあうせ一如く一所不住の塔とあり結縁ハなまバ
 推辞し辭もいふ退却て息女中のかこのあちをほさしめけやそ早は
 中とありし大丈夫の一言ハ駟も及ぬものを某よあてて更改やと諭し結
 うバ衆皆大に欽びく壽を返更も盃を巡りしつその暁會ハ席を巻死
 稍盃盤を納めたり圍宅食疲勞よるもバ甲夜よりそや臥つ津津猪谷
 加賀澤ハ豫く輝の趣を知らせり却説次の日彼三郷の雲ハ判五が

宿所は詣来り。恩を謝し。飲びを述彼。某甲が女見。これハ某乙が妻。とて義秀がねてうじ。婦女們を乞う。人目も羞む抱くもあつ。或ハ身をとらて泣くあり。れを見て又笑ふありて。酔ふ如く醒る如く。哀む如く飲ぶ。且くして甲余もろ。歩目を拭ひ。爺達いよあやう。人當國の立山ハ一の世う。なる地獄あり。件の山は龍の穴ハ亡者逢ふ。とせハいども。定る。是ハ平く鬼は捉ま。細の山。逐筆れ。あやう。とて。紀妻女見が。甦る。還る。あやう。紀生いと有る。紀子なる。びや。一人ハ。皆点。降土山の佛の心。中も及ぬ。と諦や。と。弥陀ハ。則朝日奈。ぬ。あ。ま。出現。去。ひて。救ひ。と。せ。あ。ひ。と。よ。その。恩。徳。を。忘。る。な。と。い。と。置。き。く。礼。拜。し。食。ば。く。退。け。る。され。ら。の。や。彼。此。は。隠。れ。た。く。婦。員。新。川。射。水。砥。並。九。四。郡。の。良。賤。士。庶。然。ぶ。と。限。ま。あ。貧。乏。衣。を。售。て。家。に。置。酒。慶。賀。し。近。地。ハ。勇。士。と。わ。が。ま。ん。と。て。苞。苴。を。覬。名。薄。を。投。判。五。が。宿。所。群。集。せ。る。あ。い。も。義。秀。ハ。物。を。も。あ。ま。と。受。む。況。對。面。ま。る。と。な。と。さ。る。と。か。沙。汰。せ。と。口。を。餅。め。か。せ。し。ふ。い。も。ま。も。く。稱。噴。して。名。ハ。お。の。づ。ら。は。さ。ふ。ら。か。る。と。れ。も。稻。向。判。五。ハ。義。秀。は。禁。め。ら。れ。た。く。件。の。辨。の。赴。を。富。盛。介。に。祈。む。魔。平。太。が。首。級。と。刎。耳。を。バ。地。藏。尊。寺。の。側。に。埋。ま。せ。夫。婦。ハ。本。堂。へ。系。詣。して。沙。金。十。兩。を。獻。む。友。鶴。義。秀。が。る。冥。福。を。祈。る。と。他。更。な。る。と。う。兇。徒。の。一。條。果。く。あ。る。ト。夫。婦。ハ。更。一。三。と。相。謀。て。黄。道。吉。日。を。卜。つ。友。鶴。を。めて。義。秀。が。側。室。と。正。しく。夫。婦。と。唱。徳。ども。婚。姻。の。規。式。形。の。ど。く。と。行。ひ。一。家。の。飲。び。疆。た。く。百。年。の。契。を。濃。之。洞。房。花。燭。夜。を。連。夜。て。男。女。の。間。疎。く。盧。生。ハ。枕。覺。と。記。た。く。槐。安。の。樂。之。竭。と。記。あ。り。と。ん。え。く。い。と。め。て。し。か。く。と。な。や。夜。を。



と 腰 義 羅 俱
観 の 秀 山 利
る 怪 罽 如



おひる

後人蛇足附余て三十六地獄の名を負し愚者婦人と或懲て錢を
 呂の國とて地獄の制度も金といふ鄙俗はいつたやとせりては
 足も吾用の旅日を費して妻子小物をやせんやうぬ所為と有
 歎ふとせりてのうかつさか途をうえて越中國礪波郡俱利伽羅山と
 過る小なるこの地は加越の封疆にしていぬる壽永二年五月十日木曾冠者
 兼仲朝臣平家の大軍小うち捷て数万騎を黒坂の南谷追落し積敵將
 知度為盛貞康ホと悉皆とるる地方なり。嶺より宇の道場あり昔
 越の大徳らの山よこけ登り千歳龍は身を撲して俱利伽羅明王の
 秘法と行ひひり六龍より神龍わたりて大徳を守護しとるに
 この山を俱利伽羅嶽といふ松水小矢部柳原笠野富田竹小橋
 みかみの山は相並ぶ源平當時の戦場あり。美秀らの岑を踰りて日ハ

暮れにして風層を犯し道と遠く人既疲れり直下せば深谷地を
 帯りて燐火青苔の叢は閃閃向上まへ高嶺天を横りて遊魂暮雲の
 中は呻ふ離るる路傍の草花は紅わいて戦死の鮮血は染るるごとく
 墨くくろく谷陰の白骨は半朽く老松怪松を肥せ轉るるもろもろの
 浪ちりを碎く後名ものゝり七人の智畧一世の英雄の俱利伽羅の嶽
 よろも高に勲績は今あま迹認ゆる古戦の分野榮枯得失一叢の烟と
 びらいて墓を哀れむとてむらうとてゆたもはゆたもは谷底を直下して立在む
 折るる忽地夕霧立ちあて其処ともろぬ谷の中より数万騎の周は声
 曳く咄と震動して具鉦の音馬鑢の音矢叫び太刀響凄しく彷彿
 として合戦の場よその骨を置ごとく毛骨のまらるるをたれども美秀は
 立ちて睨詰る折もあれ颯と吹揚る風と共に宵のあましく飛鳥は

あり。拂ひのあむ合あひあとあり。さきば人の體たいなう。鳴な乎うなるのよと取とりて。
 そぐま谷や捨すんとせむ。後ののこよ声こゑあり。三さん即いぬぬしくと兩りょう三さん声せい喚わけけり。
 こぐ名なとある。ハ什麼なに誰たれ也や。同どうああむむ信しんとんんととば。五ご尺じやくああまま地ちと去きけ。
 直ちやく躬くわうと立たる。武者ぶしや一いつ騎き白はく地ちの錦にしんの鎧よろい直ちやく垂しよ白はく精せい好こうの奴やつら袴はかまと張ちやく草そう茶ちや
 威いの鎧よろい穿くて。白はく星せいの堊たわと戴たいた廿じやく四し差さる。白はく羽うの矢やと苦く高こうの負おるる。
 白はく木きの弓ゆみを小こ腕うで握にぎる。白はく馬まよ白はく鞍くら置おて水みづ色いろの厚あつ總そうと掛かる。ふふちち騎き
 了りやう。現げんの絆はなの為ため体たいこの陽やう人にんをもんもんええととば。美み秀しゆハ又また向むか谷や廿じやく間ま近ちかく
 よよハ切きををりりんんととの鞍くらよよととけけて。疾やく視しああててをを立たちちる。

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之三終

吉田屋

吉田屋

